

氏 名	福庭 暢彦
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第434号
学位授与年月日	平成27年3月4日
審 査 委 員	主査 教授 石橋 豊
	副査 教授 津本 周作
	副査 教授 杉本 利嗣

論文審査の結果の要旨

過敏性腸症候群（irritable bowel syndrome:IBS）は、器質的異常を示さない機能性消化管疾患とされるがその機序は定まらない。近年、潰瘍性大腸炎（ulcerative colitis:UC）の臨床症候的寛解症例でのIBS様症状の存在からIBSの炎症性機序が注目されているが、内視鏡的寛解を確認した症例での研究は少ない。本研究では、臨床症候的および内視鏡的寛解を確認したUC症例におけるIBS様症状の罹患率を検討した。外来通院中のUC患者208例を対象としclinical activity index4以下を臨床症候的寛解群、内MATTSGrade2以下を内視鏡的寛解群、健診受診者330例をコントロール群としてRome III質問票を用いてIBS様症状の有無を調査した。その結果、臨床症候的寛解群で26.7%(46/172)、内視鏡的寛解群で25.6%(10/39)にIBS様症状を認めいずれもコントロール群の4.8%(16/330)に比して有意($p<0.01$)に高かった。また内視鏡的寛解群においてMATTSGrade1に限ると15.4%とやや頻度は低下したがコントロール群より高い傾向を示した。これらの結果は、臨床症候的および内視鏡的寛解症例においてもIBS様症状の罹患率が高く、内視鏡的な更なる寛解とともに罹患率が減少することを示している。すなわち、UC寛解症例におけるIBS様症状には、軽度ながら残存する炎症が影響していることが示唆された。本研究は、IBSの発生機序の一つとして炎症機転を示唆しており、今後の新たな治療戦略を期待させるものである。